

私は四年生のとき兵隊に行った。終戦後暫くして学校へ行って見たが、教室にはまだ二、三人の生徒しか居らず、学校はガランとしていた。久しぶりなので教官室に顔を出した。するといきなり「君、丁度よかった。卒業証書ができてるので持って行き給え」と言う。私は兵隊に行っていたため卒業に備するだけの勉強はしておらず、卒業したいとは思っていなかったので心外だったが、当時は敗戦のショック（今の人に説明しても理解して貰えないだろう）で教師も誰もみな茫然自失していて、ものごとどう対処してよいか判らないといった状態であったし、私にしても、ただ死なずに帰れた感慨をかみしめるだけだったから、文句の言いやうもなく、一種あきらめの気持で卒業証書を受け取った。ただし、その後も学校に通い、一カ月くらいして生徒がポツ／＼と戻り始め、二、三カ月くらいして頭数が増え、授業が再開されたので、私も授業に出た。学校側もそれを断るわけにはゆかなかつたのだろう。就職したのは卒業後半年くらいたってからであった。当時としては学校の言うとおりに卒業せざるを得なかったが、今思えば不満は多々ある。

⑦ 概況 (一)

昭和二十一年一月八日発送、「外国人教師ニ関スル調、生徒数、校舎、教員数等調ニ関スル件回答」控の記入のある部分を「聯合軍最高司令部関係書類 東京美術学校庶務掛」より転載する。

外国人教師ニ関スル件

一、本校ニ於テハ目下ノ處外国人教師ヲ必要トセズ
二、該当学科ナシ

一、學徒數、校舎、教員數等調 東京美術學校
二、學徒數志願者數等ニ関スル調

(一) 學徒數 昭和二十年十二月現在

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	研究科	計
男	一八一	一七八	一六九	一一四	二四	六六六
女	一八一	一七八	一六九	一一四	二四	六六六
計	一八一	一七八	一六九	一一四	二四	六六六

尚此ノ外ニ外地未歸還者五〇名程アリ

(二) 昭和二十年度ニ於ケル志願者數等

1、入學志願者數等 三三六

2、不合格者數 一八九

二、校舎ニ関スル調

(四) 現ニ使用可能ナリ

(四) 現ニ使用可能校舎ノ収容力 學徒數 七〇〇名

三、校舎使用ニ関スル調

(二) 現ニ二校以上ニテ使用中(外事専門学校ニ一部貸与ス)

四、学校以外ノ建物ニ関スル調

(一) 該当建物ナシ

五、教員數ニ関スル調

(一) 昭和十五年四月現在 教授 助教授 嘱託講師 計

二三 一六 三四 七二

- (一) 昭和二十年三月一日現在 専任教授一八 兼任教授一
教授、助教授 一五 嘱託講師 二七 計六二（四）
- (二) 同二十一年四月一日ニ於ケル見込數、右ニ同ジ 計六二

⑧ 概況 (一)

昭和二十一年三月発送「聯合軍司令部ヨリノ調査照会ニ関スル件回答」控より本校の二十年度の現状に関する部分を抜粹する。

学校組織

本校ノ学科ヲ本科及師範科トス

本科ヲ分チテ日本画科、油画科、彫刻科、工芸科及建築科トス

彫刻科及工芸科ヲ其ノ専門ノ実技ニ依リ左ノ各部ニ分ツ

彫刻科

塑造部、木彫部

工芸科

図案部、彫金部、鍛金部、铸金部、漆工部

本校ニ研究科ヲ置ク 別ニ選科及聴講生ヲ置クコトアリ

学校事務分掌

本校事務ヲ分掌スル為庶務課、會計課、教務課、生徒課、文庫課ヲ置ク

事務分掌	官職名	氏名
学務校長	教授	上野直昭
教務課長	同	村田良策
生徒課長	同	小塚新一郎

授業分掌	官職名	氏名
文庫課長	講師	脇本十九郎
庶務課長	事務官	小林義郎
會計課長	同	同
日本画科主任	教授	安田新三郎
油画科主任	同	梅原龍三郎
彫刻科主任	同	平櫛倬太郎
建築科主任	同	岡田捷五郎
工芸科主任	同	富本憲吉
図案部主任	同	広川松五郎
彫金部主任	同	海野清
鍛金部主任	同	石田英一
铸金部主任	同	内藤春治
漆工部主任	同	松田権六
師範科主任	同	松田義之

昭和十九年度生徒総數 五三一名。

予科制度無シ。

文庫及図書閲覧施設有リ。藏書數一六、七七八冊 他ニ標本陳列館ノ施設二棟アリ。

職員及生徒ヲ含ム校友会組織アリ。

〔設備その他必要とする件〕

材料研究所、学科研究室ノ設置、学生生徒用並ニ教師用寄宿設備、学生・教師俱樂部、娯樂室、食堂等ノ設置ヲ望ム。
 学用品並ニ各科用資材（例ヘバ和・洋紙、絵具、布、金属資材、化学薬品類、実習用燃料等）ノ絶対優先配給ノ実施。
 奈良、京都方面古美術見学旅行ノ復活実現ノ件